

第三百八十七回 青葉会

平成三十年七月二十六日(木) 午後六時〜九時 文京区民センター

〈選者〉

◎ 川口孤舟

〈出席者〉

今井紀久男 大林猛 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 小西弘子 在間千恵

〈投句〉

豊田ゆたか 中野一灯 星田啓子

伊賀山そらお 楠田彦十 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 古田昇 宮内規雄

山崎亜也 山内天牛 山田けい子 渡邊盛雄

〈紙上選句〉

赤田堅 安部眞希子 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章 福島正明 M・S氏

山本三恵

《互選句》

七点

◎ 夕焼を思ひきり蹴り尻上がり

孤舟 (猛・五・千・灯・正・啓・三)

六点

◎ 鎮まりて厩舎に大型扇風機

弘子 (眞・孤・五・敏・允・啓)

◎ D51(デロイモ)の誇りの煙夏野行く

堂哉 (堅・五・弘・ゆ・允・啓)

◎ 草笛の一音外れ里昏るる

一灯 (猛・孤・五・ゆ・正・啓)

◎ 天空の出湯かぶるや星涼し

全 (堅・猛・孤・五・弘・三)

(勝頼最期の地の近く)

四点

◎ 波荒き拉致の浜辺に草茂る

紀久男 (眞・忠・孤・弘)

泥を踏む感覚久しき裸足かな

彦十 (千・龍・ゆ・M)

三点

七夕や爺(じい)もと言はれ願ひ書く

忠彦 (千・龍・敏)

蟻蝶(まくなぎ)のぶつかつてきて謝らず

孤舟 (弘・正・啓)

被災地は断水といふ酷暑かな

恵洲 (眞・猛・ゆ)

雲の峰崩れ崩れて富士麗姿

ゆたか (紀・灯・M)

◎ どぜう鍋浅草六区迷ひ出で(飯田屋)

一灯 (堅・五・正)

◎ 月鉾と夜空の星と人の波

けい子 (孤・ゆ・龍)

音立てて漬けて十日の辣韭食む

天牛 (紀・忠・灯)

夏豪雨里を呑みこむ泥の川

そらお (忠・敏)

猛暑避けラストワルツの映画観る

猛 (紀・敏)

夏祭団七九郎兵衛背中(せむ)の華

彦十 (允・正)

(紀…三段切れになるので要一考)

五郎太 (眞・ゆ)

平成の記録作りし大暑かな

全 (弘・三)

◎ 一日をとにもにすごせし紅木槿

全 (忠・啓)

◎ 君たちにキリンレモンを夏燃ゆる

全 (孤・敏)

地下鉄を出て一斉の蟬時雨

健介 (敏・M)

涼を呼ぶ懐しき音チンドン屋

千恵 (紀・龍)

◎ 地下鉄に朝顔持ちちて乗る佳人

ゆたか (孤・允)

螢火となりて彼世に光るかも

全 (灯・允)

緑濃き瀬音の出湯宵明星

一灯 (ゆ・允)

◎ ドナウ航く古城に懸る二重虹

規雄 (孤・龍)

◎ ひまはりの笑顔忘るなああの世でも

全 (孤・M)

◎ 夏蝶の果敢に風に抗(あらが)へり

啓子 (紀・孤)

◎ 赤や黄のペンキぶちまけたやうな夏

(◎…中七が字余りなので要一考)

青き夢ちぎれちぎれに昼寝覚

盛雄 (紀・龍)

一点

百年に一度の溽暑思惟乱る  
腰引いてせせらぎ渉る水遊び  
けふは句会散髪すませ冷酒提げ  
梅花藻(も)の白き疏水に誘(いざなは)れ

(醒井)

全 (紀・灯)  
そらお (紀)  
紀久男 (忠)  
全 (堅)

近頃は軒に風鈴見当らず  
ワシワシとセミの叫びも煮ゆるかな  
大暑来る炎暑極暑がお待ちかね  
七夕や床屋の帰り竹を買ふ  
パワハラと妻に喝され心太  
抱き心地よき年頃の竹婦人  
ほうたるの明滅いのち燃やしつつ  
夕菅や雲の中よりロープウエー  
週明けの虫の居所白扇子  
第三のアジアの匂ひ夏旺ん

(成田空港ターミナル)

猛 (千)  
全 (堅)  
全 (千)  
忠彦 (弘)  
全 (紀)  
孤舟 (忠)  
全 (猛)  
全 (眞)  
彦十 (三)  
五郎太 (三)

◎

昼の熱冷めぬ堤や遠花火  
白鱸の天麩羅これでひととほり  
風鈴やお伽の国へ誘ふ午後  
赤き爪サンダルに映ゆ盛夏かな  
ビーサンを銀座にまでも履いて古稀  
道の辺の花の囁き緑(みどり)風  
夏草の猛々しくあり立ち竦む  
緑陰にひとり珈琲ジャズ喫茶  
酒ならで男三人かきこほり  
三伏や選みし鯉鮎味噌煮込み  
風に添ふ大王崎の百合の花  
(志摩半島の灯台)

弘子 (灯)  
全 (紀)  
健介 (孤)  
千恵 (M)  
啓子 (M)  
ゆたか (堅)  
啓子 (猛)  
全 (紀)  
亜也 (正)  
全 (紀)  
けい子 (紀)  
天牛 (忠)  
全 (眞)

かき氷男は爺(じいじ)の私だけ  
拾萬円の和傘を作る加賀の夏

(番傘)

●次回青葉会

八月二十三日(木) 午後六時〜九時 文京区民センター

▲当季雑詠各自五句 投句は二句

九月二十七日(木) 全

十月以降 第四木曜日の午後一時半〜 文京区民センターになります

以上 文責 紀久男

一 今回は川口選者以下10名出席。暑さに体調を崩され珍しく欠席された天牛さんから10名投句。①万里子先生からの半年ぶりの選句と一筆箋(一月参加された多摩句会の成績表)②眞希子さんからの選句FAX③弘子さんからの「詩人大使クローデルと日本展」シンポジウム:彼の句集を巡って芳賀徹と俳人ら(神奈川近代文学館)の模様(五郎太さんと亜也さんも聴衆に)

④一灯さんの伊吹嶺関東支部合同句集「炉火」第4集⑤小生持参の日経切抜き(俳句甲子園がもたらした)もの7月4日。吉右衛門の私の履歴書7月24日「音楽の感動」⑥恵洲さん執筆の青葉会紹介の社友会HP改定版の原稿を回覧し乍ら開会。猛さんの披露で御覧のように孤舟選者、堂哉さん、弘子さん、一灯さんが好成績でした。

二 関係者近況

廃校の庭に泳がす鯉幟 眞希子 病院の前に工場樹々茂る 盛雄  
遠景に新開のビル群麦の秋 全 青柚子にふひとむせたる木霊かな 全  
サングラス行きずり装ひ見送りぬ 全 ボルテージ上る浪花のギヤル御輿 全  
ヘルパーと娘より仲良し柿若葉 全 板前の年季経し手ににぎり鮪 健介

若牧師の熱血説教青嵐 全 下町の粹な娘の祭髪 紀久男  
婚礼の招きへ即答夏立つ夜 弘子 |「きさらぎ句会」7月  
父さんとお揃ひリユック子供の日 全 穂の芽やけもの道の沢の水 盛雄

火星めく眼底写真走り梅雨 全 平成の汚れを憂ふ松の芯 全  
布巾つよく絞る五月来りけり 青史 戦なき半島の日々水鉄砲 全  
スーパはいつもの順路走り諸 全 |毎日新聞兵庫文芸 若林京子選  
輪島朝市飛魚の小蠅を逐ふ媼 全 盛り塩の山崩れかけたる暑さかな 允章  
高層から地べたに移る花見かな 紀久男 つまみたる碁石の曇る溽暑かな 全

―「森の座」8月号

玉音に噎びし真昼夾竹桃 全

三 一灯さん(擲句会代表)の「炉火」第四集より全20句紹介します。

風花は光の欠けら遠白馬 穂高嶺に傾く入日鳥渡る  
火の酒に氷柱かち割りシーハイル すれちがふ一会の会釈濃りんだう  
安曇野の雪載せて着く夜行バス ピツケルの岩根突く音霧深し  
膝で漕ぐ熊笹の径雲の峰 這松へ消ゆ雷鳥の親子連れ  
大雪溪くぐり来し水掬ひ飲む 雲海の波立つかなた富士浮ぶ  
下山して先づ回し飲む岩魚酒 巖頭に半跏の男大雲海  
笹噛みし根雪で拭ふ登山靴 雷鳥の母呼ぶ声や遭難碑  
遠雷や風横なぐる縦走路 軋むほど満天の星八ヶ岳  
ホルンの音渡る暮色の草紅葉 とよもせりダム解き放つ雪解水  
雲海の落日に酌むひとり酒 春雷や磁針の震ふ三角点

四 「俳句あるふあ」夏号特集。西村和子自選句より小生好みを抄出してみました。

熱爛の夫にも捨てし夢あらむ ふたり四人そしてひとりの葱刻む  
蒹葭草スープよ煮えよ子よ癒えよ ぬくめ酒芝居の後を語るべく  
初桜立ち出でて子はふり向かず 舟去りて月光残る夏芝居  
風狂に瘋癲に夏心地よき 露けしや我が真言は五七五  
霜の夜の夫待つ心習ひなほ 歳晩の京に隠れ家奥座敷